

ほのぼの

第44号

平成28年

11月

発行

信行寺門信徒会

神戸市須磨区戎町1-2-3

TEL.078-732-5209

北野天満宮



「あたりまえ」と見る眼

住職

ものごとを「あたりまえ」と見る眼は、一番大事なことを見えにくくしているようです。それで私は失敗を何度も繰り返し、後悔の連続の日々をおくっています。妻や幼い子供に思いを残しながらこの世を去っていかれた人の詩に「あたりまえ」というのがあります。

食事が食べられる

夜になるとちゃんと眠れ

そしてまた朝がくる

空気を胸いっぱいする

笑える、泣ける、叫ぶこともできる

走りまわれる

みんなあたりまえのこと

こんなすばらしいことを、みんな決してよろこばないそのありがたさを知っているのは、

それを失くした人たちだけ

失われて、はじめてそのものごとの価値に気づき後悔する。残念ながらこれが私たちの悲しい日常生活です。老いを感じるようになって初めて「若さ」のすばらしさが実感できます。日常の「疲れ」も、一晚寝ればとれていたものが、なかなか回復しない。こんなはずじゃない。まだそんなに老けこんではないと思うってみても、どうにもなりません。「健康」についても同じです。元氣でおれることが「あたりまえ」と思い込んでいますから、ここが悪い、あそこが痛いと思病ります。いいところはいっぱいあることに気づかないままです。

わたしたちの日常生活は「慣れ」を基本にして過ごしています。「慣れ」は、習慣ですから「思い込み」を「ほんとうのことだ」と錯覚し、「あたりまえのことだ」と受け取ってしまいます。不都合なことや不幸なことには、すぐに気づくのに、幸せなことには気づきにくい。自分が幸せであることを「あたりまえだ」と決めこんでいるからです。

物にけつまずくと、「誰がここに置いたんだ」と、腹が立ちます。自分が足元をしつかり見ていなかった

たことに気づくことはまれです。自分が歩くところには邪魔になるものがないのが「あたりまえ」と思い込んでいるからです。

この世での「あたりまえ」は、生まれたものは必ず死ぬということです。会えば必ず別れの日がくる。人間の努力の及ばない世界です。だから、今日の一日を無駄にしないようにし、今ある出会いを大事にしなければならぬのに、明日も生きておれる、みんなと一緒におれると思病込んで日々を繰り返している。

このような現実に気づいていないわたしに阿弥陀様は仰せられます。『あたりまえ』という考えを見直さないと不平と不満で人生を終わるぞ』と。

邪見と驕慢で生きている者は、眼を閉ざし、耳を閉ざして心を閉ざす。そして「それも知っている、あれも分かっている」という。「つもり」だけなのに。

仏さまの仰せられる世界を聞かせていただきころ豊かな生涯を生きてゆきましょう。

旧跡参拝旅行

木下 雅恵

六月二十七日～二十八日、旧跡参拝旅行に参加させていただきました。

今年は法然上人ご旧跡光明坊をはじめ「西の日光」と称される耕三寺等、しまなみ海道方面を訪れました。

「松虫・鈴虫事件」で有名な光明坊では、ご住職のユ―モアたっぷりの楽しいお話を聞き、心暖まる時間をご過ごさせていただきました。また、法然上人の杖より芽生えたと伝えられるイブキビヤクシンの樹も興味深く拝見しました。

次に訪ねた「西の日光」耕三寺は広い敷地に様々な塔や堂、蔵が立ち並び、下段、中段、上段と登るにつれて広がる美しく荘厳な空間に圧倒されました。

雨が心配でしたが、参拝、見学中はどこでも全く



傘いらずでした。お宿の道後に着くころにはすっかり雨でしたが、約半数の有志で道後温泉本館へ。「坊ちゃんの間」や皇室専用浴室等を見学し、お湯を楽しみながら明治時代へ思いを馳せました。

二日目も傘いらずで、伊予かすり会館や大三島・大山祇（おおよまづみ）神社宝物館等を見学し、楽しく充実した時を過ごせました。

幹事の皆様、素晴らしい企画と入念なご準備、ありがとうございました。



第三十四回夏季特別法座にて

森本 勝

信行寺の夏季法座が真夏の太陽が照り付ける、八月二十日(土)に開かれました。暑い中約五十名の出席のもと多彩なプログラムで法座は進行していきましました。

お勤めの後、住職の「あたりまえとしあわせ」と題して「自分の人生をどう受け取って生きているか」について法話があり、私達の日常生活がどれほど自分勝手なものか大いに反省させられました。お話を聞いて初めて気づかされることとが想像以上に多いことがわかり、恥ずかしさに顔が赤らむ思いがしました。

本堂での法話の後、会場は二階の礼拝堂に移され、昼食、その後みやび会のコーラスと共に「手のひらを太陽に」を皆さんで合唱しました。また、木下雅恵さんの独唱を聞かせ



て頂きました。浜尾千代子さんの指導によるヨガ体操を行い、副住職の長男、空城君の留学体験報告がありました。

空城君は、昨年八月から約一年間アメリカに留学されていました。写真を交えながら、いろいろな体験をしてくれました。今までまだ子供じみたところがありませんでしたが、すっかり大人びて青年僧侶として成長が見え、一段と頼もしく感じました。

「可愛い子には旅をさせろ」と昔からの言い伝え通り、留学体験は人格形成に大いに効果があつたように思います。この分では、近い将来空城君の法話が聞けるのではないかと密かな期待を抱いたものです。

記念に頂いたはさみ入れ、箸置き、しおりなどお世話くださった方々に感謝を込めて、今年も盛会のうちに終えることができました。



アメリカ留学を体験して

米田 空城

僕は、今年の六月にアメリカでの一年間の留学を終え帰国しました。この間、語学留学という形で海外生活しましたが、語学だけではなく、今まで触れたことがない異文化に触れることで、日本に生まれて日本人として生きることとは何なのかを考えさせられました。

多様な文化や宗教が共存している国アメリカでは、他者を理解して尊重し合うことを理想とするような風潮がありました。しかしながら、現実ではいまだに残る人種間での格差問題や差別がみられる面もありました。

僕の友達の一人にイスラム教の子がいましたが、小学校の時はよくいじめられていたと言っていました。最近テロリストやイスラム国といったあまりいい



印象を持たれていないイスラム教ですが、他者を理解していないのに、人種や宗教といった理由で差別されることは、本当に悲しいことだと思いました。

どこの国でも宗教というものはその国の人々にとって生活の一部であり、特にアメリカでは、キリスト教が人々の生活に根強く関わっていました。日本では、無宗教な人や仏教徒であつても実際は何もわかっていないという人が多くなってきたと思います。そんな中で、お寺に生まれて阿弥陀様の教えを日常的に聞いて触れていくという環境はとてもありがたい事だと感じました。このアメリカでの留学を通じて、自分がどれだけ恵まれていろいろな方々に支えられて生きているのかを改めて実感しています。



仏陀の道を旅する（後編）

篠島 益夫

成田からデリーまで空路約六〇〇〇キロ、デリーから国内線で約六八〇キロのバラナシへ飛び、以降はバスで初転法輪の地、鹿野苑・現サルナートから成道の地・ブッダガヤを経て（前編ほのぼの四三号）、北インドとネパールの仏跡を巡る約二〇〇〇キロの旅（後編）、デリーから成田に戻る十四日間の旅でした。

原始仏教に近い大パリニツバーナ経（略称・パリ涅槃経・中村元訳）によれば、釈尊が大涅槃にお入りになる時、永らくお側に仕えたアーナンダが嘆き「尊師がお亡くなりになった後にはお会いすることもお仕えることもできないでしょう」と悲しむのに対して、釈尊は「アーナンダよ、信仰心のある真面目な人が私を偲んで実際に訪れて見て感激する場所は次の四つである」「誕生地であるルンビニ苑、さとりを開いたブッダガヤ、教えを説き始めたサルナート、ニルバーナの境地に入ったクシナガルである」と示されました。「アーナンダよ、この

四つを遍歴して淨らかな心で死ぬならば、彼らはすべて死後に善いところ、天の世界に生まれるであろう」と諭されたと書かれています。私の旅にこの四つは含まれていますが、釈尊以来の高僧方、善知識のお導きを肌身感じながらの二週間でした。

二月二十五日

王舎城・現ラジギール
観無量寿経の舞台
靈鷲山（鷲の峰）
頂に鷲に似た大岩
無量寿経説法の地



ナーランダ大学跡
一万人の学生・八〇〇人の先生、三つの図書館、九世紀まで王家が支援、法顕、玄奘三蔵や西域、中国の僧も学んだ世界最古の大学

二月二十八日

クシナガル大涅槃堂
カククター河で沐浴され、クシナガルに赴かれた釈尊は二本並んだサラー樹の間の床に頭北面西右脇臥で涅槃に入られた



二月二十九日
ネパール・テイラウ
ラコット説
カピラバストウ城
釈尊が二十九歳ま
で過ごされた城、四
囲の城壁も半ば埋
もれているが出家
されたという東門
も発掘中



ネパール・ルンビニ苑
釈尊のお生まれになった所
誕生館の内部は撮
影禁止、イスラム侵
攻時にマヤー夫人
と幼い釈尊のお顔
が削り取られて
痛々しい

三月一日
シュラバステイ
祇園精舎(サヘート)
ガンダ・クティ僧院跡
釈尊が雨安居をよ
く過ごされた場所、
大規模な僧院、尼僧
院跡が残る
阿弥陀経説法の地



西遊旅行HPより

信行寺行事予定とご案内

◇報恩講法要

十二月十七日（土）法話 藤実 無極 先生
十二月十八日（日）法話 住職

二日間とも午後二時より四時までです。
ご都合に合わせて、一日でもお参り下さい。

◇新春初法座

平成二十九年 一月五日（木）

お正月をお寺で楽しくお迎えしましょう。
お勤め、法話の後、皆さんと楽しく語らいながら、御馳走（お世話の方々手作り料理を
持ち寄ってくださいます）をいただきます。

本堂の『二河白道』の絵を描いてくださった
鈴木福男画伯が、去る七月十二日に逝去されました。
信行寺では、前住職の時代から永年大変お世話
になったお方です。衷心より哀悼の意を表します。

編集後記

九月二十六日、滋賀県の葉山
仏教婦人会八十余名の方が研修
旅行で来寺されました。本堂に
て住職が「私たちは、周りの人
との横の絆の糸と、祖先からつながって来ている
命という縦の絆の糸が、布をつくるように織り込
まれて今の存在がある」とお話しされました。笑
いもまじえながらの和やかな法話の後、信行寺の
震災復興とその過程等の写真を熱心にご覧になっ
ていました。十月にも広島県から、ご本山の伝灯
奉告法要参拝の後、百名ほどの門徒さんがお参り
に来られます。このように沢山の方が来て下さる
ようになったのは、信行寺が参拝旅行に行った先
で出会った方とご縁ができ、それがきっかけで他
府県の門徒さん方のバス研修旅行のコースに信行
寺を加えて頂くことになったからだそうです。多
くの方々に信行寺のことを知って頂けることはと
ても有難くうれしいご縁ですね。



多田 清子